

大きなけやきの木の下で 絵本のはなしをしましょうよ。



2023年10月のはじめごろ こまばようちえん

みなさま、こんにちは！

日本は四季のある国と言われますが、どうも春と秋が短くなっているような気がします。気持ちの良い秋を少しでも長く楽しみたいですね。

これから園庭のけやきやイチョウ、柿、さくらなどの木々が、葉の色を少しずつ変化させていって、私たちに季節の移ろいを見せてくれます。風に舞い散る葉っぱと子どもたち。眺めているだけで、幸せな気持ちになります。

では、大きなけやきの木の下で、絵本のはなしをいたしましょう。

① たんぽぽ組・年少組のみなさんに。

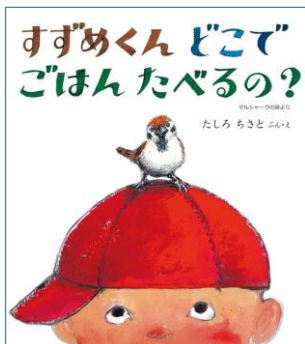


● 『あーとあー』

小野寺悦子・作 堀川理万子・絵（福音館書店）2015年/990円

上をむいて、下を向いて、両手を広げて、「あー」って言うてみたら、どんな感じかな。どんな「あー」が聞こえてくるかな。口を手のひらでたたきながらだと、どう？「あー」って言いながら、のどを触ってみたらどんな感じがする？ うれしいとき、失敗しちゃった時、おいしかった時、いろんな場面でちがう「あー」が飛び出してくるね。声と体と気持ち

ちってつながっているんですね。わかりきっていることなのに、改めて遊びながら確かめさせてくれる絵本です。「あー」を視覚化した画家の堀川理万子さんのセンスも素晴らしいです。(須藤)



●『すずめくん どこでごはんを食べるの?』

たしろちさと・文・絵（福音館書店）2016年/990円

一羽のすずめが、動物園でカバやキツネやライオンやフラミンゴたちの餌を少し食べたり、キリンの水を飲んだり、ゾウのところで砂あびをして過ごしています。自由気ままでいいなと思っていたら、ワニに食べられそうになって、ドキッ。遠足で来た5人の子どもたちがすずめを優しく見守っていて、最後はおにぎりのご飯粒をあげている様子に、ほっこりします。この絵本は、「森は生きている」「しずかなおはなし」などの作者サムイル・マルシャークの詩を、たしろさんが翻案したものです。それにしても、最近、すずめの姿を見なくなったような気がします。ちょっと寂しいです。(須藤)

※翻案とは「すでに作られている小説や戯曲などをもとにして登場人物や場所などに変化・工夫を加えて作品を作ること」です。

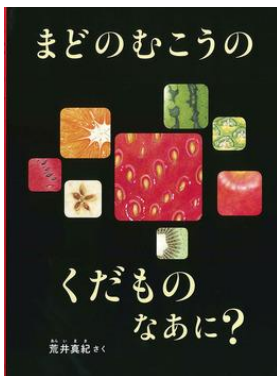


●『もじもじこぶくん』

小野寺悦子 文 きくちちき 絵（福音館書店）2016年/1100円（重版未定）

こぶたのこぶくんは、とても恥ずかしがりやさん。アイスクリームを注文したいのに、もじもじ、もじもじ。そんなこぶくんを尻目に、サイおくさんやワニにいさんたちが次々にやってきては好きな味のアイスクリームを買っていきます。ますますうなだれて消えいり

そんなこぶくんの耳に、「いちごあじのアイスクリーム、ひとつ くださーい」というちっちな声が聞こえてきました。それは小さな小さなアリのありいちゃんの声でした。アイスクリームやさん(やぎねえさん)に気づいてもらえない、と泣くありいちゃんのために、こぶくんは自分でもびっくりするくらい大きな声で注文することができました。こぶくんカッコイイぞ。ふたりが食べるアイスクリームの美味しそうなこと。昔、読んだ本にでてきた、“弱いものが強いものを育てる”という言葉を、ふと思い出しました。(近藤)



●荒井真紀 作 (福音館書店)2019年/1320円 (重版未定)

小さくて真っ黒な窓枠のむこうにあるのは、さて、何のくだものかな?色も形も質感もさまざま、いろんなくだものが登場。小さい人から大きい人までシンプルに楽しめます。最初のページはドヤ顔で「いちご!」でも、だんだん難しくなって…最後は大人も「???」。くだものの造形って、こんなに美しいのねえ…と静かに感嘆しながら、緻密で繊細な絵をじっくり堪能。よく練られた構成にもうなります。16歳から画家の故・熊田千佳募氏に師事した作者は、『たんぽぽ』という作品で海外の大きな賞を受賞。他にも『あずき』『ひまわり』『あさがお』『トマト』などの絵本や、自然をテーマにした書籍雑誌の挿絵やイラストで活躍されています。(近藤)

② 年中・年長組のみなさんに。



●『だいふくもち』

田島征三・作 (白泉社)1100円/1977年

ごさくという、ぐうたら暮らしていた男の家の床下から、「はらへった。小豆をくわせろ」と訴える声がしました。してみると、ぺちゃんこにつぶれた大福でした。ごさくが小豆をもらってきて大福の上に乗せてやると、ふしぎふしぎ、小豆をくるりと包んで、ぷっくらふくらんだと思ったら、小さな大福餅を次々うみはじめました。それがすごくおいしくて、たちまち大評判。ごさくは大金持ちになりました。めでたし、めでたし……なんてことはありません。人間、欲深いと身を滅ぼします。土佐言葉と田島征三さん独特の画風が魅力の絵本です。ちなみに私は粒あんの大福が好きです。(須藤)



●『エルネスト たびするいぬのものがたり』

ヨッヘン・シュトゥーマン・作 関口裕昭絵 (フレーベル館) 2009年/1,320円(重版未定)

犬のエルネストに手紙をくれる友だちはいません。ところが、ある日誰かから島の絵葉書が届きます。見たことのない文字だし、エルネストは差出人に心当たりがありません。そこで、差出人を探しに行きます。絵葉書を手掛かりに、カンガルーの郵便局員や航空便を扱う伝書バトやセイウチの切手コレクターやハヤブサの貨物便のパイロットなどに教えてもらいながら、やっと差出人のイグアナじいさんと会うことができました。でも残念なことに、「誤配」……だったのです。エルネストは「ぼくじゃなかったんだ」とがっかりします。さあ、それから彼はどうしたと思います？ 誠実で親切な行動が、嬉しい結末につながります。思わず、「やったね、エルネスト！」と声をかけてしまいました。なんだか私も誰かに手紙を書きたくなりました。(須藤)



大塚勇三/訳 桜井誠/絵 岩波書店
イングリッド・ニイマン/絵 菱木晃子/訳 岩波書店

●『こんにちは、長くつ下のピッピ』

アストリッド・リンドグレン（著）イングリッド・ニイマン（イラスト）

いしいとしこ（翻訳）（徳間書店）2004年/1650円

スウェーデンの児童文学作家、アストリッド・リンドグレン(故人)の書いた『長くつ下のピッピ』をご存じの方が多いでしょう。76年ものあいだ、世界中の子どもたちの心をわしづかみにしてきた主人公ピッピの凄さたるや。その絵本版である本書にも「おそろしく強くて、世界中のおまわりさんもかなわない」とある通り、9歳の子どもながら、同居の馬だってサーカスの怪力男だって、軽々と持ち上げちゃう。さらに驚きなのは、両親がいなくても「ごたごた荘」に一人で暮らしているということ(ママはピッピが赤ちゃんのときに亡くなり、大好きな船乗りのパパは嵐で行方不明)。でも、悲壮感などは皆無です。何からも自由で、生き生きとして。ピッピは料理だってお手のもの。床におりない遊びが得意だったり、「アリに噛まれたら噛み返したらいいのよ(『長くつ下のピッピ』より抜粋)」と言ったり。こんな友だちがいてくれたらどんなに楽しくて頼もしいことでしょう。ピッピと仲良しになるトミーとアニカのように、たくさん子どもたちが、強くて優しくて底抜けに明るいピッピに出会えますように。

今回は、より小さな人たち向けの絵本の紹介ですけれど(絵本の内容は『長くつ下のピッピ』のエピソードをいくつか抜き取って構成してある)、小学生になったらぜひ、本家本元の児童書も楽しんでください。リンドグレン自身が惚れ込んでいたというイングリッド・ニイマンの絵がまたすばらしく魅力的(個人的に大ファン)。児童書の書影も載せておきますね。(近藤)



● 『おばけのジョージ』

ロバート・ブライト 作 光吉夏弥 訳 (福音館書店) 1978年/1100円

秋といえば…七五三のお祝い！…よりも、今の時代はハロウィン！なのかな。こんなに愛らしいおばけなら大歓迎～♪ 毎晩決まった時間に階段を「みしり」、ドアのちょうつがいを「ぎー」と鳴らして、家の主であるホイットィカーご夫妻やネコのハーマン、フクロウのオリバーの役に立っていたおばけの子、ジョージ(←ハーマンとオリバーだけはジョージの存在を知っています)。でもある日、ホイットィカーさんが階段とドアを修理したために、「みしり」も「ぎー」も鳴らなくなってしまう。困り果てたジョージは家を出ていくことに。さて、ジョージはどうなるのでしょうか？ モノクロの色使い、素朴であたたかみのある描線は安心感を誘い、どの家にも先住おばけがいたり、実はおばけよりもおそろしげな人間がいたりするユーモアもさりげなく効いています。(近藤)

③ 大人のみなさんに。



● 『ゲゲゲ ピーピー おなかのびょうき』

細谷亮太・文 早川純子・(童心社) 1540円/2014年

聖路加国際病院副院長を務められた小児科医の細谷亮太さんが、「体」についてわかりやすく教えてくれる「からだ だから すごい！」シリーズの1冊です。体に入りたくてたまらないウィルスたちが、どんなふうに入ってきて、胃や腸にどんな悪さをするかがよくわかります。あとがきの「お腹の具合の悪いところを触ると、まわりよりも冷たくなっています。昔から『手当て』といいます、子どもが安心してできるようにそっと手を当ててあたた

めてください」という細谷先生の言葉に、共感します。(須藤)



●『おじいちゃんがおばけになったわけ』

キム・フォップス・オーカソン 作 訳 (あすなろ書房)2005年/1430円

我が子と絵本を読み合っていた時代、読みながら涙をこらえきれなかったことが何度かあります。その中の1冊がこの本です。

心臓発作で突然この世を去ったおじいちゃんが、孫のエリックの前に現れます。なんと、おばけになって。前々からナイスコンビだったことがわかる二人のそれからのやりとりは、悲しいどころか、ユーモアと遊びゴコロが冴えていてクスツとしちゃうくらい。でもおじいちゃんは、何かを思い出したくてたまらないのです。ずっとおばけのままではいけない、と。やっと…やっと…、それが何だったかをおじいちゃんが思い出し、いちばん大事に思っている孫のエリックに告げるシーンで、涙腺が崩壊しました。デンマーク発の絵本。北欧の絵本って、全般的に一種独特の雰囲気をもっていると感じます。とても好き。(近藤)



●はじめての「からだ」と「性」のえほん『だいたい だいたい どこだ?』

えんみ さきこ 文 かわはら みずまる 絵(大泉書店)2021年/1320円

「性教育は重要」ということはわかっているのだけど…どんなふうに伝えればいいの?子ども不在のゆがんだ性情報があふれる中、不安を感じていらっしやる親御さんは多いかも

しれません。では何をどんなふうに話せばいいの？そんな時はこういう絵本に助けをもらいましょう。「じぶんのからだは じぶんのもの ずっとずっと だいじだいじ」…まずは、自分のプライベートパーツ(性器をはじめ、胸、口)を、「特別に大事なところ」として小さな子どもでも意識できるように、平易な言葉とわかりやすい絵で伝えてくれます。あとがきの「大人の方へ」もすばらしい。「子どもへの性暴力は身近に存在する以上、まずは幼少期から、プライベートパーツを知ることからはじめよう。性教育は“一人ひとりが大切な存在である”ことを学ぶこと(近藤要約)」この本の作者は、医大生の頃から性教育活動やたくさんさんの講演会を続けていらっしゃる、現役・産婦人科の女医さん(お母さん先生)です。

「性」に関すること。親が恥ずかしがらず誠実に、でもできるだけフランクに語りかければ、子どもはそのまっすぐな心の器で、ちゃんと受け取ってくれることでしょう。2冊目3冊目を考えたら？…安心して大丈夫。良心的な絵本や書籍もたくさん出ていますよ。(近藤)

・絵本はざっくりと次のように対象年齢にそって紹介していきます。ただ対象年齢はあくまで目安です。お子さんが興味を示した絵本、お子さんに読んであげたいと思った絵本を見つけたら、手にとってみてください。

- ① たんぽぽ組・年少組のみなさんに
- ② 年中・年長組のみなさんに
- ③ 大人のみなさんに

- ・「重版未定」の絵本も積極的に取り上げます。図書館に入っていますし、出版社にリクエストが多くなると復刊される可能性もあります。
- ・紹介した絵本は重版未定(中古品)も含めて藤井チズ子前理事長からいただいた寄附金で極力購入し、本の部屋に入れます。藤色のテープが目印です。